JAPAN - VIET NAM
1973 - 2018

ĐẠI HỌC HÀNỘI

JAPANFOUNDATION
国際交流基金

NGHIÊN CỨU - GIẢNG DẠY

NGÔN NGỮ NHẬT VÀ NHẬT BẢN HỌC

TRONG XU THẾ HỘI NHẬP, PHÁT TRIỂN

グローバル化時代における日本語教育と日本研究

NHÀ XUẤT BẢN ĐẠI HỌC QUỐC GIA HÀ NỘI

NHÀ XUẤT BẢN
ĐẠI HỌC QUỐC GIA HÀ NỘI
16 Hàng Chuối - Hai Bà Trưng - Hà Nội

Tổng Biên tập: (024) 397140511;
Hành chính: (024) 39714899; Fax: (024) 39729436
Biên tập: (024) 39714896;
Kế hoạch và hợp tác xuất bản: (024) 39728806

Chịu trách nhiệm xuất bản: Giám đốc - Tổng biên tập: TS. PHẠM THỊ TRÂM

Biên tập chuyên ngành: Đặng Lê Minh - Phạm Thị Thu Hương
Biên tập xuất bản: Phạm Thị Thu Hương
Chế bản: Đỗ Thị Hồng Sâm
Trình bày bìa: Nguyễn Ngọc Anh
Đối tác liên kết: Đại học Hà Nội

SÁCH LIÊN KẾT

NGHIÊN CỨU - GIẢNG DẠY NGÔN NGỮ NHẬT VÀ NHẬT BẢN HỌC TRONG XU THẾ HỘI NHẬP, PHÁT TRIỂN

グローバル化時代における日本語教育と日本研究

Mã số: 2I - 146ĐH2018, ISBN: 978-604-968-835-5
In 300 cuốn, khổ 19 x 27 cm tại Công ty CP in sách Việt Nam, Địa chỉ: 22B Hai Bà Trưng - Hoàn Kiếm - Hà Nội
Số xuất bản: 2685-2018/CXBIPH/01- 250/ĐHQGHN, ngày 02/8/2018.
Quyết định xuất bản số: 1314 LK-XH/QĐ - NXB ĐHQGHN ngày 10/10/2018.

In xong và nộp lưu chiểu năm 2018.

NGHIÊN CỨU - GIẢNG DẠY

NGÔN NGỮ NHẬT VÀ NHẬT BẢN HỌC

TRONG XU THẾ HỘI NHẬP, PHÁT TRIỂN

グローバル化時代における日本語教育と日本研究

ISBN: 978-604-968-835-5

9 786049 688355

Giá: 200.000đ

インドネシア人日本語学習者の発話における日本語の発音パターン

Franky Reymond Najoan
State University of Manado, Indonesia

Abstract: *One of the most difficult parts in Japanese language acquisition is a feature sound called special mora and its relation to accent. Previous researches have tried to overcome such a problem by using several methods but the results have not been satisfactory yet. This research is aimed to identify pronunciation patterns used by the learners and find out the solutions to the problem. The data were collected through audio recording of 13 students who were asked to pronounce a list of words and sentences. Then, the data were analyzed using speech analyzer. The results showed that out 13 students who were asked to pronounce 9 stimuli words and 9 sentences that contain those stimuli words, only 2 students (15.4%) could pronounce those words close to native speaker-like. The variation of speech patterns indicates that the pronunciation pattern of the learners was in the inter-language position when acquiring the Japanese phonemes.*

Key words: *pronunciation pattern, special mora, accent, phoneme acquisition*

1. はじめに

日本語の音声学的要素の中でL2学習者にとって習得しにくいものはアクセント、イントネーション、長音、促音等である（助川1992、Najoan 2008, 2002）。長音や促音は日本語では特殊音又は特殊拍という。特殊音には撥音も含まれる。これらの 発音はインドネシア語母語話者にとって習得が難しいものである。

この特殊音の発音は第二言語習得では難しい要素であるので、注目されている。特に母語に特殊音がない学習者にとって習得が難しい。日本語学習者によく起こる問題は長音の短音化、短音の長音化である。それにアクセントの問題もある。例えば、「高校」は平板型であるのに、頭高型のような発音として実現され、長音が脱落（短音化）する。さらに単語内に特殊拍が二つある場合、いずれか又は両方の長音が脱落する傾向がある。

ただし、今までの研究では、エラーの研究に集中され、それを直すための学習活動へと研究が進んできた。教育現場では発音の間違いを直すための一番いい方法が見つかっていない状況にある。そこで、今回は日本語の特殊音が含まれている単語の発音について、学習者の発話にはどんなパターンがあるかを特定しようと考えている。どんな場面で発音できるか、間違ったときどんなエラーであるか、そのエラーはパターンがあるか、どのようなパターンであろうか。

2. 先行研究

特殊拍に関する研究は多くされているが、ここでは本研究に一番近いものを選び、記述する。

Najoan (2008) はインドネシアの日本語学習者を対象に日本語の発音について調べた。その結果、特殊音の発音が難しいということがわかっている。ただし、この研究では発音パターンについて分析していない。

鶴谷（2008）はオーストラリアの日本語学習者に対して調査を行い、学習者の発話パターンには母語の影響があるとされている。

そして、Najoan（2012）はインドネシア人日本語学習者の発音を調べ、学習者が長音音節の中にアクセントがあることを知らないということがわかっている。ただし、この研究では学習者の発音パターンについて詳しく分析されていない。発音パターンにはアクセントの問題だけではない。特殊拍の脱落や挿入の問題もある。Najoan　(2012)ではそのことについて触れている。学習者の発音には長音の単音化、単音の長音化が起こっているとしている。

そこで、本研究では学習者の発音の習得状況がわかるように、学習者の発音パターンについて詳細に調査する。

3. 調査目的と課題

本研究では、特殊拍（長音/R/，促音/Q/，撥音/N/）が含まれる単語のアクセントの傾向と子音・母音の長短、つまり発音パターンについて特定することを目的としている。特に学習者の発話においてどんなパターンが現れるか、そのパターンは定期的であるかどうかを明らかにしたい。

また、そのエラーが発生する要因が何であるかを知るために学習者の母語との関連性についても考察する。

そこで、本研究では特殊拍の含まれる単語の長さとアクセントに焦点を当てて、以下の課題を設定する。

(1) 学習者の発話中にある特殊拍の発音パターンにどのようなものがあるか。

(2) エラーがある場合、どのようなパターンがあるか。

(3) そのエラーのパターンは母語の影響があるか。

4. 調査方法

本研究は、学習者の発音の習得状況を知るために、現在の使用言語について記述する。そのような状況を調べることによって現在の学習者の発音は目的言語にどのぐらい近いか記述することができる。そのために、次のような手続きをした。

4.1. 対象者

本研究はマナド国立大学日本語学科の学生のうち、2015年、2016年度入学学生で、調査の時点では2年生、13名を対象とした。学生たちはインドネシア語を母語としている。

4.2. 調査手続き

4.2.1. データ収集

本研究のデータは音声データである。単語リストと文を学習者に渡して言わせた。自然に発音してもらうために、パワーポイントを使って、単語を一つずつ　見せて発話してもらった。緊張や間違いを防ぐために、単語ごとを３回言わせて、三つ目の発音をデータとして使用する。また、同じ単語を文（*sentence frame*）の中に入れて同様に発話してもらった。使用した単語は特殊拍が含まれる語で、学習者がこれまで勉強した単語である。学習者の発話はすべて録音した。

4.2.2. データ分析

録音したデータは、まず音声編集ソフトAudacity（:http://www.audacityteam.org/) を使ってデータ分析に使う部分を切り取った。そして、それを音声分析ソフト *Speech Analyzer* (http://www-01.sil.org/computing/sa/index.htm)　を使って分析し、スペクトルグラムを出して、学習者の発音パターンを抽出し、視覚的に確認するという手順で行なった。スペクトラムで確認しながら学習者の発音パターンを書き出して、パターン別にカテゴリー化した。

5. 結果と考察

データを分析した結果、次のようなことがわかった。

5.1. 学習者の発音パターンとエラーの形態

以下、研究協力者13名が発話した9語（単語のみと文中に入れたもの）の発音を分析した結果を記述する。アクセントのパターンは、高いところをH、低いところをLと書き、母音の長さについて、特殊拍を表す母音が発音されないものつまり長音が脱落したものを下線符号（ _ ）、長音化したものを長音符号（ー）で表す。本研究で使用した特殊拍の記号として次の通りである。

/R/ は、長母音拍を表す。特殊拍の長さは普通拍と同じぐらいとする。

/Q/ は、促音拍を表す。例えば、子音 /k/ に伴う時に/Q/が/k/ になる。
例：「いっかい」= /iQkai/ = ikkai 「いったい」= /iQtai/ = ittai

/N/は撥音拍「ん」を表す記号である。

(1) 病院「びょういん」の発音パターン

「びょういん」は4モーラ語/byo-R-i-N/で、アクセント型は平板型（HHHH）である。この単語には特殊拍長音 /R/と撥音 /N/が含まれるが、ここでは長音 /R/のみ分析対象とする。まず、単独で発音してもらったデータについて見てみよう。

「びょういん」の発音について分析した結果、13名の発話者の発音を見ると発音パターンが2種類あったが、がネイティブに近い（*native-like* な）ものは一つもない、すべてエラーである。平板型なので、最後まで下がらないはずなのに10名（76.9%）の学習者が第3モーラが下がっていて（HHLL）、3名（23.1%）が最後のモーラが下がっている（HHHL）。つまり、学習者は「びょういん」の発音の習得ができていない状況にある。

同じ単語「びょういん」を文「病院はどこですか」に入れて学習者に発話してもらったところ、結果は次の通りである。文中の「びょういん」の発音は、13名中5名（38.5%）がネイティブに近い発音ができた。残りの8名が8種類の発音パターンに分布されている。学習者の多くは単語の意味だけ覚えてアクセント型や音の長さについて定着していない。

(2) 学校「がっこう」の発音パターン

「がっこう」は、/ga-Q-ko-R/の４モーラからなり、アクセント型は平板型である。この単語の中に促音/Q/と長母音/R/の二つの特殊拍が含まれている。「がっこう」を単独で発音してもらい、その結果、13名中2名（15.4%）がネ

イティブに近い発音(HHHH)をして、他の9名が7種類の発音パターンに分布している（LLHH 8%, LHHL 8%, HHLL 15%）。それにアクセントのエラーだけではなく長音が脱落したものもある（HHL_ 23%, LHL_ 8%, H_LL 8%）。つまり、学習者は「がっこう」という単語が使用頻度の高いものにもかかわらず、その発音は習得されていない。

同じ単語を「学校はいつ休みですか」という文中に入れた場合、13名中2名（15.4%）しか、ネイティブに近い発音をしていない。残りの11名はバラバラのパターンで発音されている（HHHL, HHHLL, HHLLH, H_LLH 各8%, HHLLL 23%。長音が脱落しているものもある（HHL_L, H_H_L, HHH_. 各8%)。

(3) 飛行機「ひこうき」の発音パターン

「ひこうき」は/hi-ko-R-ki/の4つのモーラからなり、アクセント型は中高型である。この単語の中には特殊拍長母音/R/が含まれている。単独で発音してもらう「ひこうき」の発音は13名中4名（30.8%）がネイティブに近い発音パターン、残りの7名（53.8%）が似たようなパターンであるが、違うのは第4モーラが下がっている。平板型の発音は1名である。

同じ単語「ひこうき」を文「飛行機で行きます」に入れて発話してもらった結果、13名中3名（23%）しかネイティブに近い発音されていない。残り10名はバラバラのパターンである（LHHH H 38%, LHHL L 15%, H-HH H, LH_L H 23%である。単語の発音と違って、文中の発音パターンは5種類もある。学習者は文中ではアクセントを確保できないことがわかった。

(4) 一切「いっさい」の発音パターン

「いっさい」は/i-Q-sa-i/の４モーラからなり、アクセント型は頭高型（HLLL）である。この単語の中に特殊拍/Q/が含まれている。単独で発音してもらう「いっさい」の発音は13名中1人（7.6%）しかネイティブに近い発音できる人がない。残りはバラバラで、長音の単音化 H_LL、単音の長音化H-HL 各1名（8%）である。

同じ単語を文「一切関係ありません」に入れて発話してもらった結果、13名中ネイティブに近い発音は3名（23%）しかいない。残り10名は、HHHH 5名（38%), HHHL, LHLL, LLHH 3名（23%）、長音が脱落したものは2名（1.5%）である。

(5) 切手「きって」の発音パターン

「きって」は3モーラ語であり、アクセント型は平板型（HHH / LHH）である。この単語には特殊拍 /Q/（促音）が含まれている。「きって」の発音では、3名（23.1%）がアクセント型も音の長さもネイティブに近い発音である。アクセントも間違い、短音化（促音が脱落）したもの（.H_H）が1名

(7.7%)、6名(46%)　がHHL、そして、アクセントも間違い、促音が長音H_Lに変わったものが3名(23.1%)である。

同じ単語「きって」を文「切手を2枚ください」に入れて発音してもらった結果、アクセントの間違いと促音の脱落が起きた。ネイティブに近い発音は3名(23%)しかいない。残り10名の発音は、HHL L 5名(38.5%)、HHH L. 1名(8%)、促音が脱落したものH_LLは1名(8%)、HHL Hが3名(23%)である。

(6)「コーヒー」の発音について

「コーヒー」は4モーラ語であり、アクセント型が中高型(LHHL)である。この単語の中に特殊拍 /R/(長音)が含まれている。

「コーヒー」の発音について、ネイティブに近い発音は2名(15.4%)しかない。アクセント型が似ているが、下がり目が違うところなので、不自然になった(HHLL)というパターンは9名(69.2%)。そして、アクセントが間違っているし、長さも足りない(長音が脱落した)ものは、*HHL_.* と*HHH_それぞれ1名*(8%)。

同じ単語「コーヒー」を文「私はコーヒーが飲めない」に入れた場合の発音パターンはネイティブに近い発音は3名(23.1%)、平板型のような発音は4名(30.8%)、アクセント型は平板型のようで、長音が脱落したもの(H_H_H)1名(8%)、L_HLL 1名(8%)、HHL_L1名(8%)、H_LL1名(8%)、HHLL2名(15%)である。

(7)「みんな」の発音パターン

「みんな」は3モーラ語で、アクセント型は平板型である。この単語の中に特殊拍の撥音/N/が含まれている。

13名の学習者の発音では、ネイティブに近い発音は4名(30.8%)、残りの9名は、HHLというパターンは8名(61.5%)、長音化したもの(HLL-)が1名(7.7%)である。

同じ単語「みんな」を文「みんなで行きましょう」に入れた場合の発音パターンは13名中ネイティブに近い発音は1名(7.7%)しかいない。助詞が下がらず、高いままで発音されたため平板になってしまったものは6名(46.2%)である。そして、撥音/N/が脱落したものは3名(23%)である。

(8) 誕生日「たんじょうび」の発音パターン

「たんじょうび」は5モーラ語で、アクセント型は平板型である。単語の中に特殊拍の撥音/N/と長音/R/が含まれている。13名中ネイティブに近い発音は2名(15.4%)で、残りの発音は下がり目が違うのと長音が脱落(単音化)したものである。そのパターンはHHHHL4名(31%)、LLHHL 3名(23%)LHH_L 1名(8%)、LHHHL 1名(8%)、HHHHL 1名(8%)、HHHHH 1名(8%)である。

同じ単語「たんじょうび」を文「誕生日はいつですか」に入れた場合、13名中ネイティブに近い発音は、たった1名（8%）で、文中の「たんじょうび」の発音は13名中一人しかネイティブに近い発音はない。残りの人は発音がバラバラで、下がり目が違うところと、長音が脱落したものがあり、エラーのパターンは10種類ある。学習者が文を発話するときには、アクセントのこと全く気にしていない。

(9) 先生「せんせい」の発音パターン

「せんせい」は /se-N-se-R/ の4モーラ語であり、アクセントが中高型であるが最後のモーラで下がる。単語の中には特殊拍の撥音/N/と長音/R/が含まれている。13名中のネイティブに近い発音は4名（30.8%）である。残りの発音は2種類のパターンがある。HHLLのパターンは8名（61.5%）、平板のようなパターン（HHH_）が1名（8%）である。

同じ単語「せんせい」を文「私は先生になりたいです」に入れた場合、13名中ネイティブに近い発音は5名（38.5%）である。残りの学習者は5種類の発音パターンに分布されている。LHLL 1名（8%）、 HLLL(L) 1名（8%)、HHHL(L) 1名（8%）、HHLL（H）3名（23%）、 LLLL（H）2名（ 15.4%）である。

これは学習者の「せんせい」という単語の発音が定着していないことを示している。

全体の結果は、表１と表2で示している。

表1にあるように、9の単語を13名の学習者に発話してもらった結果、平均2名（15.4%）しか*native-like*な発音ができない。すべての単語が既習語であるのに、発音はバラバラである。

また、表2のように、表1の同じ単語を文に入れて発話してもらっても同じ結果である。

表1 【単語を単独で発音する場合】エラーの種類とネイティブに近い発音

No.	単語と ピッチ・パターン	モーラ	エラーの発音 パターン	*Native-like*な発音	
				できた人数	%
1	びょういん（LHHH）	/byo-R-i-N/	2種類	0名	0.0
2	がっこう（LHHH）	/ga-Q-ko-R/	10種類	2名	15.4
3	ひこうき（LHLL）	/hi-ko-R-ki/	3種類	4名	30.8
4	いっさい (HLLL)	/i-Q-sa-i/	5種類	1名	7.7
5	きって (LHH)	/ki-Q-te/	4種類	3名	23.1
6	コーヒー (LHHL)	/ko-R-hi-R/	4種類	2名	15.4
7	みんな (LHH)	/mi-N-na/	3種類	4名	30.8
8	たんじょうび(LHHLL)	/ta-N-jo-R-bi/	7種類	0名	0.0
9	せんせい(LHHL)	/se-N-se-R/	3種類	4名	30.8
			平均	2名	**15.4**

表2 【文中で発音する場合】エラーの数とネイティブに近い発音

No.	単語と ピッチ・パターン	モーラ数	エラーの発音 パターン	*Native-like*の発音	
				できた人数	%
1	びょういんは LHHH)	/byo-R-i-N / wa	9種類	5名	38.5
2	がっこうは（LHHH）	/ga-Q-ko-R / wa	11種類	3名	23.1
3	ひこうきで（LHLL）	/hi-ko-R-ki/ de	8種類	3名	23.1
4	いっさい～ない(HLLL)	/i-Q-sa-i/ _ ...nai	6種類	3名	23.1
5	きってを (LHH)	/ki-Q-te/ o	5種類	3名	23.1
6	コーヒーが(LHHL)	/ko-R-hi-R/	7種類	0名	0.0
7	みんなで(LHH)	/mi-N-na/ de	7種類	0名	0.0
8	たんじょうびは(LHHLL)	/o-ta-N-jo-R-bi/ wa	11種類	1名	7.7
9	せんせいに(LHHL)	/se-N-se-R/ ini	6種類	3名	23.1
			平均	2	**15.4**

5.2. 考察

本調査は特殊拍を含む語に焦点を当てて、特に発音パターンについて調べた。データ分析の結果からわかるように9語を単独で発音しても、文中に入れて発音しても母語話者のような（native-like）発音は13名の協力者のうち2名（8%）しかいない。協力者は日本語学科の学生であり、2年ぐらいすでに日本語を勉強している。調査に使った単語はすべて既習語であり、意味が分かっている。発音の授業では日本語のアクセントも特殊拍について教わっているが、この結果からみると、アクセントと特殊拍の発音だけが習得できていない。アクセントと特殊拍の発音の習得は簡単なものではないと言えよう。つまり、日本語の発音がインドネシア人学習者にとって難しくないにも関わらず定着の面では簡単なものではない。習得ができるまで時間かかるものである。

そして、学習者のエラーの発音パターンを見ると幅広く分布されており、発音パターンが個人別にバラバラになっている。なぜこのような現象になっているだろう。母語の影響を受けるというのであれば、パターンはそんなにバラエティに富んでいないはずである。なぜならインドネシア語のアクセント・パターンは単語の後ろから２音節目にくるという簡単なルールであるからだ。音節概念から分析すると、日本語の特殊拍を含む語は、音節化になりやすい。例えば、「がっこう」を /gak+kou/という２つの音節になりがちである。そうすると、インドネシア語のパターンで発音すればすべて頭高型のようなパターンになるはず。しかし、そうではなく、発音パターンがバラバラになっている。これは、第二言語理論で言えば、学習者の発音は中間言語にあるということが言える。学習者は目標言語をまだ完全に習得できていない状況にあるからである。

6. まとめと今後の課題

6.1. まとめ

本調査は日本語の特殊拍を含む単語の発音について調べた。データ分析結果から次のようなことが言えよう。

（1）調査対象語がすべて既習語で意味だけわかるが、発音パターンについてまだ身についていない。

（2）学習者の発音パターンはエラーが多くて、その種類がバラエティに富んでいる。発音のエラーがアクセントだけではなく、長音と促音の長さについて不十分であった。

（3）学習者の発音パターンには一部母語の影響が見られるが、その多くは学習者なりの発音になっているので、これは中間言語的パターンを示している。

この調査から日本語のアクセントと特殊拍の習得について単語の意味と並行していないことがわかった。発音の習得は時間がかかることと言えよう。

6.2. 今後の課題

今回の研究はアクセントと特殊拍についての発音パターンに焦点を当てて、調査を行った。発音パターンとは、一つの単語のアクセントと特殊拍のパターンについてである。今回分かったことを生かして、発音の学習には学習者のパターンを考慮に入れて、より適切な方法、発音指導を考え、実践を行うことにする。

参考文献

1. 戸田貴子(2003)「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」『音声研究』7(2)：70-83，日本音声学会
2. Halim, Amran. (1984). *Intonasi, dalam hubungan dengan Sintaksis Bahasa Indonesia*. Jakarta: Djambatan
3. Najoan, Franky R. 2008. Indonesia Nihongo gakushuusha ni yoru Nihongo no Hatsuon Chosa. *Journal interlingua, fbs Unima No.2 (1), pp 45-56*
4. Najoan, Franky R. et.al (2012). The Acquisition of Japanese Vowel Length Contrast by Indonesian Native speakers: Evidence from Perception and Production. *Journal of Fonetik Society of Japan*, Vol.16 No.2, Agust, 2012 pp.28 – 39
5. The Japan Foundation. (2009). *Onsei o oshieru*. Tokyo: Hitsuji shobo
6. Tsurutani, Chiharu. (2008). *Pronunciation and Rhythm of Japanese as a Second Language*. Hiroshima: Keisui.
7. Toda, T. (2003) *Second Language Speech Perception and Production: Acquisition of Phonological Contrasts in Japanese*, Lanham, MD: University Press of America.